
夢見鳥のいる空

十日月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢見鳥のいる空

【Nコード】

N0284M

【作者名】

十日月

【あらすじ】

【更新一時停止します】

列車事故に巻き込まれた主人公は、異世界へと飛ばされてしまう。そこには、クリアすれば何でも夢が叶うという地下ダンジョンがあった。

主人公は彼にだけ聞こえる「声」と共にダンジョンクリアを目指す。

雨の水曜日、異世界へ

雨の水曜日。

電車の中で俺は遅刻しそうになっていた。何とか座れたのはラッキ―だったけど、携帯のナビによると走ってギリギリ間に合うかどうかのようだった。

遅刻はどうしても嫌だ。クラス担任が厳しく、時代錯誤にも廊下に立たされるのだ。

外は叩きつけるような雨で、窓ガラスに幾本もの線をつけていた。嫌な天気だ、とぼんやり思った。しかも夏日で、蒸し暑い。

ふと視線をずらすと、目の前に子供が立っているのに気がついた。吊革には手が届かず、金属の手すりに掴まっている。

小学生くらいだろう、背は小さく、隣のサラリーマンのベルトと同じ位置に目があった。それは身長165センチの俺が座った目線と丁度同じ高さで、その瞬間ばかりと視線が合わさった。

宝石みたいに透き通った黒目、背中にかかる長いストレートの髪。滅多に見えないような美少女で、俺は思わず目を見開いた。朝の通勤電車に絶世の美少女がいるのだ。凄い違和感だった。

少女がじつと俺を見つめるので、俺は慌てて視線をそらした。吸い込まれそうな目にどきりとした。

だがふと、この電車は次の駅から凄まじく混むことを思い出した。そうするとこんなに小さな女の子は潰れてしまうだろう。

「きみ、」

だから席を譲ろうと声をかけた。

瞬間、

ガガン！！

凄まじい音と衝撃に襲われる。体が宙に放り出された。

それはまるでスローモーションだった。

投げ出された俺の前に少女がいる。細い手足が頼りなさげで、目は

こぼれ落ちそうなくらい見開いていた。広がる、赤いワンピース。俺は声をかけるために差し出していた手をさらに伸ばして少女の腕を掴んだ。抱き込むように、腕の中に閉じ込める。無意識だったが、頭を手のひらで包み、顔は俺のワイシャツに押し付けた。ちらつと見えた窓の外は黒かった。地面だ。

その上に今まで座っていた赤いシートがある。

何が何だか分からない。

思わず息を呑み。

次の瞬間、身体に重い衝撃がやってきた。

がは、と肺が圧迫されて声が漏れた気がしたが、認識できたかはや定かではない。

俺の意識は、途絶えた。

風の音と土の匂いがして、俺は目を覚ました。

眼を開けると、視界は滲むように霞んでいた。意識は夢の中のようにぼんやりと濁っている。それでも分かる色は、青だった。空の色だろう。

仰向けに寝ているのだ。

「う、あつ」

重い腕を動かして、両手を広げて大の字になった。手の甲にちくちくとした草と、土の感触がする。

それは、俺に言葉では言い表せないほどの安心をもたらした。地面に足が着いているのだ。

俺は長い長い深呼吸をした。

肺の中の空気を全て吐き出して、新しい、新鮮なそれに入れ替える。

体中の血が巡っているさまを想像する。

心臓から流れ、左腕、左足、右足、右腕。そして心臓に戻る。自然と目は閉じていて、再び開けると、視界はすっかりクリアになっていた。

見えた青はやはり空で、絵の具のような真つ青だった。雲はなく、ただ太陽が直視できないほどの強さで照っていた。

最後に少し息を吐いて、ゆっくりと頭を起こした。視界はぶれない。頭も特に痛まない。

そのままゆっくりゆっくり起き上がり、胸から腕、足へ視線を滑らすも、どこも異常はないようだった。

ワイシャツにも目立った汚れはなく、夏用黒ズボンの制服にもほころび一つ無い。革靴も履いたまま無事だったようだ。

奇跡的に無傷、というフレーズが脳裏に浮かんだ。

起き抜けはぼんやりしていた頭もようやく回転を再開し、先ほどの出来事を思い出してきていた。

まさか自分がそんなものに巻き込まれるなんて予想もしていなかったけれど、あれは、列車事故だったのだろう。車体が横転して、窓の向こうに真つ黒な地面が見えたのだから。

すっかり死んだと思っていたけれど、助かったなんて嘘みたいだ。運良く窓から放り出されたのか、なんなのか。線路沿いの草原に落ちて、草か土がクツションになって生き残れたのだろう。

立ち上がり、尻と背中についた土をはたいて落とした。やはり足も何ともない。骨に異常もなさそうだけれど、事故の後遺症は後からくると聞くし、一応病院には行った方が良いんだろうな。

そんなことを考えながら、自分の周囲を見回した。

俺が生きている以上、間違いなく無事だろうー少女を探したのだが。

「……あ」

声にならない悲鳴が喉から零れた。目に映る視界には、何もなかった。

もちろん少女は居なかつたし、横転したはずの電車も、たくさんいたはずの他の乗客も、救助にきているはずの人々も。それどころか、建物の影さえ。

そこは何もない、ただ、ただ永遠に続く草原だった。生まれて初めて見た地平線は、悪夢のように、遠い。

「うそ、だろお？」

知らず呟いた声もまた、遠かった。

夢見鳥の栓抜き

初夏の木曜日。

井戸の前に立つた俺はカラカラと音をさせてロープを引いていた。やがてなみなみと水に満ちた桶が上がってくる。それをバケツのよくな容器に移し替えて、使い終わったら桶を井戸脇に固定して戻した。

「よ、しよっ」

実は重くないのだが、見た目からつい力が入り自然と掛け声をかけてしまう。取っ手のないバケツを持ち上げ、肩に担ぐといくらか水の雫が散り、暑い日差しに火照った腕を冷やした。

「あ、そんなこと良いのに！」

掛けられた声に振り向く。茶色の長い髪をした女性が駆け寄ってくる。

彼女は俺が今手に持っている容器の持ち主だ。

名前は、シエリアさん。

「大したことじゃありませんから」

手を伸ばしてくる彼女に微笑む。

「そんな。だつて重いでしょ？」

「いいえ。俺はこれでも男ですから。力仕事ならできますから、何でも言つてくださいね」

肩のバケツを軽く持ち上げると、シエリアさんは驚いたようだった。水をギリギリまで入れた容器は、重さにして五キロほど。女性にとつては重いものだろう。

「力が強いよね。さすがでも、やっぱり悪いわ。お客様なのに」「でも俺は金無し宿無しですから。しばらく泊めて頂く恩返しにでも」

「その泊めるの自体が恩返しなのよ？」

シエリアさんは不思議そうに言う。

「うちは宿屋だから部屋は余っているし、なにより、あなたは命の恩人なんだから！」

命の恩人、という言葉に、俺は苦笑するしかなかった。とてもそんな立派なものじゃないのだけれど。

バケツを運びながら、ふと我に返ったように思い返す。列車事故にあっただはずの、昨日。

そうあれはまだ昨日のことなのだ。

草原でただ立っていた俺の耳に、ギィ、という何かの鳴き声が入り込んだ。とても大きな音だ。

ぼんやりと目線をあげると、頭上から降りかかるように大きな影。思わず喉奥で悲鳴が漏れて、風のような音がでた。鋭い嘴がこちらに迫っているのが見えたのだ。

喰われてしまう。体が固まりそうなその瞬間、

『右よ！』

という声につられて足が勝手に右に逃げていた。

すると、巨大な鳥は俺のすぐ隣を滑空していった。

そのまま高く上昇し、ひらり、また旋回してくる。

『あれは夢見鳥よ』

耳元でまた声が聞こえる。

高く透明な声だ。声の主の姿は確認できなかった。鳥から目を離すことは死を意味すると理解していたからだ。

不思議なもので、腹をきめて鳥を睨むと、先程よりもずっと遅い動きに見えた。

『そうよ、集中して』

「逃げ切れるだろうか？」

確実にこちらに迫る嘴の前に、声に問いかける。何度も同じように逃げられるとは思えない。

しかし声は違う、と返ってきた。

『夢見鳥の爪先を見て』

嘴から滑らせるように視線をずらした。逆光でただ黒い爪先を注視する。

すると、何か掴んでいるのが分かった。

「ひと…」

そのシルエツトは人間だった。しかも、長い髪が風に晒されているのがかすかに分かった。

女性なのだ。

『助けてあげて』

声にはあらがえないような、必死な何かが込められていた。けれど。

「どうやって!」

そう、どうやって助け出せと言うのか。

空中の猛禽類から。

爪先に捕まえられた人間を?

「無理だ!俺には出来ない!」

そんなことをすれば死んでしまう。

自分が逃げられるかすら分からないのに、誰かを助けられるとは思えなかった。

『なんでよ!』

けれど声は泣きそうに滲んでいて、そんな安穩なシーンでもないのに俺の胸に罪悪感が湧いてきた。

『だって、私は助けてくれたじゃない!』

そして声は叫んだ。

助けてくれた?

何を、と動揺していると、また影が被さってきた。いつの間にか頭上まで接近してきたいたのか。

俺と声は同時にはつとした。

『上に跳んで!』

また俺の足は指示通り動いた。

ダン、地面を蹴る衝撃。

浮遊感。風の音。

俺は思わず目を見開いた。地上が遠く、自分のすぐ下に巨大鳥がいたのだ。

何も考えられなかった。

やることは決まっていたからだ。

「ああああ!」

雄叫びを上げ、必死で手を伸ばした。そして鳥の羽根を掴み、しがみつく。

体を寄せてへばりついた。

当たり前だが、鳥は獲物と狙っていた存在が背中についたことに気がついたようだ。

バサバサ羽根を鳴らし、高く、さらに高く高度を上げ始めた。

凄まじい風圧に飛ばされないように姿勢を低くした。

『すごい』

そこでまた声。

鳥の上に俺しかいないのは間違いない。だがもうそれには驚かなかった。

「君は誰だ?」

不思議ともう、この状況に恐怖はなかった。

そんなことを尋ねる場面ではないのに、聞いた。

『あなたに助けてもらった。だから私は死なずにすんだ』

その言葉で、すんと何かが胸に落ちて、納得した。

声は電車で咄嗟に抱きしめて守った少女だったのだ。

頭の中で、少女の白く華奢な姿、鈴の音のように澄んだ声が重なる。生きていたのだ。

どうなっているのかわからない、姿もないけれど。

でも、守れたのだ。

俺は守れたのだ。しかも、独りじゃない。

胸の底に光が灯る。暖かい何かをかみしめた。

巨大鳥の羽根を掴む手に力が籠もる。

「助けたい」

少女との会話とは繋がっていないが、誰を、かは伝わったらしい。

声は嬉しそうに弾む。

『羽根をよく見て、翼の付け根のあたり』

指示通りの場所を掻き分ける。

すると、一房だけ違う色の毛があった。巨大鳥は薄汚れた黄色のよ
うな色をしていたが、現れたそれは深紅。他の毛よりも長く、固い。

『それが夢見鳥の栓よ』

「せん？」

弱点ではないのだろうか？

疑問に思いながら手を伸ばす。しかし触れた瞬間、鳥は狂ったよう
に喚きだした。

振動で重心がぶれ、今にも落ちそうになる。

『思い切り引つ張って』

不安定な今、それは片手では難しかった。

一瞬迷ったが、思い切って両手で握り、二本足で背中に立った。

「せ、え、」

掛け声を呟きながら、ぐつと力を込める。腰の重心を下げ、足裏に
力を込めた。そこが丁度翼の付け根だったからか、鳥は締め付けら
れたような呻き声で鳴いた。

一瞬大人しくなった鳥の背で、俺は思いきり、体を引いた。体を仰
け反らせ、一気に。

「あ、あつ！」

そして、固い手応えは急に消える。
すぼん！

と、
場違いな間の抜けた音が響いた。

曇りの木曜日

それはワインのコルクを外した時の音に似ていた。

何か、中に限界まで詰められた所に出口ができる音。

啞然とした俺は、そのまま反動で空に放り出された。ぶわ、と体中に風を感じる。

赤い一房は手に持ったままだった。

栓、とやらを抜いたせいとか、巨大鳥も一緒に落ちている。赤い羽があつた背中からキラキラした何かが漏れ出していて、それがうっすらと空中に漂っていた。

幻想的な眺めだった。

多分そのせいであまり怖いと思わずに、鳥の爪にまだ引っかかっていた女性に手を伸ばし、鳥から助けた。

女性はぐったりとしていて、早く状態を確認した方が良さそうだった。

なんとなく、出来るような気がして、俺は近づいてきた地面を見た。頭から落下していたのでぐっと力を入れて反転し、足を下側へ。

女性を落とさないように俺の体に引き寄せて、両足の間隔をあけ、地面に同時についた。膝と腰を曲げてクッションにし、着地の衝撃を和らげ、倒れないように足裏で踏ん張って耐えた。

ズダン、と大きな音がして凄い風が起こり、周りの草が俺を中心にして地面を舐めるように折れた。

足元は少し沈み、小さなクレーターのようだ。

だが不思議と、体はどこも痛くはなかった。衝撃はあつたが、階段を三段残して飛び降りたくらいのものだった。

『いたい？』

心配そうな少女の声に、黙って首を振る。

『良かった』

すると安心そうに笑う気配。

「なあ」

たまらず話しかけた。どこを見ればいいのか分からないから、どこでもない正面を向いたまま。

「君は何なんだ？」

脈絡のない問いかけは、彼女を困らせたようだった。戸惑いを含んだ沈黙。

だが、それはすぐに破られることになった。

けほ、と腕の中の女性が苦しそうに咳をしたのだ。

『横になった方が良いよ』

「ああ」

草の上に、女性をそっと寝かせた。

長い栗色の髪に、鼻梁の通った綺麗な顔をした人だったが、その顔色は真っ青だった。

手に触れると冷たく、カタカタと震えていた。

『生きてる？』

声は心配そうだった。

俺は頷いた。

「脈に異常はないから大丈夫だ。ただ、空を運ばれて体が凍えているんだろう」

唇も紫色だった。

だがそれにしても、瞼をきつく閉じ、手のひらもガチガチに握りしめていて妙な様子だった。

痙攣ではない。

けれど、これは？

『ちがう。怖いんだよ』

「それは、そうだろう。あんな鍵爪に掴まれたら誰だって怖い」
けれど気を失ってまで握りしめた手は違和感があった。

これは気絶ではなく、むしろ夢。

『夢を見てるの。夢見鳥は肉は食べない。夢を食べるの』

「だが夢を見ているんだろう？」

『そう。悪い夢を。夢見鳥は良い夢を食べる。夢とか、希望とか、願いとかが。楽しくて綺麗な気持ちが好きなの』
「だから、それを取られると悪い夢しか残らない？」
『そう。良いものが何もなくなるまで夢を見続けて、何もなくなったら心が死ぬの。夢を見ない眠りになったら、人は、あまり生きられずに心臓が止まる』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0284m/>

夢見鳥のいる空

2010年10月11日21時02分発行